



木の根橋

推定樹齢千年の大ケヤキの根が、幅6mの奥村川をまたいで自然の橋をかたちづくっています(昭和45年県天然記念物に指定)。

第1章

丹波に息づき、まごころ丹を育む



遥かな歴史を紡いで
先人から受け継いだふるさとを
次代へとつなぐ

丹波の大地によみがえった 国内最大級の植物食恐竜



丹波竜



1. 発見当時の様子を再現した産状レプリカやウォールマウント、全身骨格標本など、楽しみながら学ぶことができる丹波竜化石工房「ちーたんの館」(令和7年7月「たんば恐竜博物館」としてリニューアルオープン)。2. 電動削岩機やハンマー、タガネなどを使った大規模発掘調査は、2007年から2012年にかけて継続的に実施され、第6次発掘調査まで行われました。3. 企業組合「元気村かみくげ」が運営する施設では、現場見学や化石発掘体験、食事、野菜や恐竜グッズの購入などもでき、地域の人たちが訪れる人をあたたかく迎えています。4. 丹波竜の里公園には、当時の姿を復元した丹波竜の実物大模型などもあります。

1億1千万年の時を経て

平成18(2006)年8月、山南町上滝の篠山層群の地層から、二人の地学愛好家によって恐竜の化石が発見されました。この恐竜は、後に新属・新種と判明し、「タンパティタニス・アミキティアエ[※]」と名付けられ、「丹波竜」の愛称で多くの人に親しまれています。

篠山川の水流が織りなす四季折々の豊かな景観、溪流沿いに建つレンガ造りの旧上久下村営上滝発電所。発見現場周辺は地元の人々に親しまれ、昔から釣りや川遊びを楽しんでいた場所でした。また、生物の巣穴などの化石が多く見られ、時代が恐竜化石の発見された「手取層群」(北陸地方/白亜紀前期)に似ていることから、専門家の間では恐竜化石発見の可能性がささやかかれていました。

平成19(2007)年1月3日、「篠山層群」から大型植物食恐竜の化石が発見されたというニュースはまたたく間に全国へと広がり、発見現場を一目見ようと、全国からたくさんの方が訪れました。

発掘調査と恐竜を活かしたまちづくり

静かな溪谷にパワーショベルの振動音が鳴り響き、岩盤の表面が土煙をあげながらゆっくりとはがされていきます。化石発見現場では、2月15日から第1次発掘調査がはじまり、発見者の足立さん、村上さんをはじめ、県立人と自然の博物館研究員や地域の発掘ボランティアの方々による発掘作業が慎重に行われました。

丹波市では、世紀の大発見をまちづくりにつなげるため、「恐竜を活かしたまちづく

り課」を新設し、発見現場周辺の自然を活用した「丹波竜の里計画」を策定しました。また、同年12月、発掘した化石のクリーニング施設として「丹波竜化石工房」を山南住民センター内にオープンしました。

さらに、化石発見現場周辺には「元気村かみくげ」を整備し、地元・上久下地域自治協議会に発見現場周辺のガイドや施設の管理運営などを委託。隣接する丹波竜の里公園には、丹波竜の実物大モニュメントや恐竜のすべり台を整備し、展望台や遊歩道、川代公園とあわせて、訪れる人たちの憩いの場になっています。

世紀の大発見でギネスにも認定

発見現場周辺の篠山層群の地層からは、丹波竜だけでなく、ティラノサウルス類などさまざまな恐竜の歯化石や、新種のカエル類、トカゲ類なども発見されています。また、恐竜の卵殻化石も多数発見され、現在までに6種類が確認されています。中でも、新属・新卵種の「ヒメウーリサス・ムラカミイ」は、発表当時、世界最小の恐竜の卵化石としてギネス世界記録にも認定されました。丹波市は、白亜紀前期の地層において世界有数の恐竜の卵殻化石産地といえます。

丹波竜との奇跡の出会いから20年

丹波竜をきっかけにたくさんのお会いが生まれ、まちは活気にあふれました。発掘の楽しさを一人でも多くの人に伝えたいと来場者たちに化石発掘のコツを伝授する指導員、ガイドとしての知識を少しでも身に付けようと恐竜について勉強し奮闘

する地域の人たち。そして、いつかこの地で発掘することを夢見て学ぶ子どもたち。

1億1千万年の眠りから覚め、私たちの前に姿を現した丹波竜は、私たちに大きな夢を運んでくれました。

丹波市では、この「出会い」を大切に、市の共有の財産である化石を守り「恐竜のまち丹波市」を全国に発信していくため、地域住民や県立人と自然の博物館、関係機関などと連携し、今後もさまざまな取り組みを展開していきます。

※タンパティタニス・アミキティアエ
ティタニスは「女の巨人」、アミキティアエは「発見者2人友情」を意味しています。



第一発見時の恐竜化石。後の調査研究で、丹波竜の肋骨と報告されました。



平成20年9月、全国公募により丹波市のマスコットキャラクター「丹波竜のちーたん」が誕生しました。丹波市PR特命大使として活躍しています。



伝統を受け継ぎ そのぬくもりを伝える

丹波布

素朴な風合いと
美しい縞模様が魅力

ひかえめでもの静か。それでいて、ほのぼのとしたあたたかさを醸し出す丹波布。素朴な風合いと、経糸(たていと)と緯糸(よこいと)が織りなす美しい縞模様が魅力で、江戸時代から明治の末頃まで、丹波佐治の地(青垣町佐治地区)で盛んに織られていました。畑で栽培した棉から糸を紡ぎ、野山の草木で染め、手織りで寝具や仕事着、普段着などに仕立てられ、京都でも佐治木綿として多くの人に愛されていました。大正時代に衰退しましたが、昭和の初めに、民芸研究家の柳宗悦に見出され、地元の方々の努力によって復興し、昭和32(1957)年に国の選択無形文化財に選ばれました。

現代に生きる丹波布は
用と美を兼ね備えた逸品



丹波布の色合いは、洗く落ち着きがある一方、独特の縞柄は近代的でモダンな雰囲気を醸し出しています。丈夫で吸水性・通気性に優れ、使えば使うほど手に馴染むことから生活小物も人気で、「紡ぐ・染める・織る」の伝統は忠実に守られながらも現代に生きる新たなスタイルで、用と美を兼ね備えた逸品となっています。

市内には、その魅力を発信する伝承館やアンテナショップがあり、生活になじむ小物や日用品などを製作・販売しています。また、技術の伝承教室やワークショップも行われ、丹波布の技術と伝統は若い世代へと受け継がれています。



野の冬をうつつして織らん 丹波布

田村菁斎



丹波布伝承館

丹波布の歴史に関する常設展示をはじめ、新人創作展や企画展を開催。技術の伝承を目的とした伝承教室や糸紡ぎ体験、織り体験などを実施しています。

column

安政2(1855)年、佐治小倉村のおせきさんがお嫁に行く時の持参ものの覚帳には、「木綿沓反 もめん嶋わた入沓 さじ嶋はんちや沓 ぬきものふさぶとん 嶋ぬきざぶとん沓枚 地ぬき嶋ひとへもの沓 嶋ぬきじばん沓」と記されています。当時は、12歳になると糸紡ぎから染色、機織りまでを親の手ほどきで身に付けていったと伝えられています。

資料:丹波布技術保存協会「丹波布の栞」

丹波布の工程

栽培した棉を手紡ぎし、野山の草木で染め、手織りで仕上げ、緯糸にくず繭から取った絹のつまみ糸を入れるのが特徴です。

1

糸紡ぎ

糸を紡ぎ出しながら糸車の心棒に絡め、糸車を回して紡錘形に巻き取っていきます。手で紡ぐことで独特の風合いが生み出されます。



2

染色

榛の木やヤマモモの樹皮、イネ科の雑草、コブナグサなど、丹波の豊かな自然が育んだ天然の材料によってやさしい色合いに染められます。



3

整経

完成品のイメージを思い描きながら、経糸を整えていきます。丹波布の縞や格子の柄はこの作業から生まれます。



4

織り

経糸の間に糸を収めた杼(ひ)を何度も往復させ、織り上げていきます。機械ではなく、すべて手織りで作られます。緯糸にくず繭から取った少量の絹のつまみ糸を入れるのが特徴です。



5

完成





柏原八幡宮本殿拝殿

優美に、力強く 日本古来の文化財建造物を支える匠の技

檜皮葺



光沢を帯びた優美な姿「檜皮葺」

日本の伝統技術である檜皮葺(ひわだぶき)は、京都の清水寺や長野の善光寺、島根の出雲大社など、全国の文化財の屋根に用いられる屋根葺き技法で、その光沢を帯びたこげ茶色の優美な姿は、日本古来の文化財建造物の象徴とされています。檜皮葺の歴史は古く飛鳥時代まで遡り、平安時代後期には格式高い屋根として、社寺や宮殿に使われるようになりました。やがて、屋根に装飾性や権威性を見出すようになり、職人たちがやわらかで力強い曲線を描く芸術的な屋根を生み出し、鎌倉時代に現在の技法がほぼ確立しました。



次代へと継承される職人の技

丹波地方を中心に採取される檜皮は「丹波の黒背皮(くろせがわ)」と呼ばれ、その美しい光沢と粘り気、丈夫でしなやかなことから高級品として重宝されてきました。さらに、京の都に近かったことから、丹波には日本屈指の檜皮職人が多く、国内を代表する伝承地域として、選定保存技術者をはじめ多くの優れた職人を輩出してきました。

特に上久下地区(山南地域)は「ひわだの里」と呼ばれ、大正から昭和初期にかけて約150人の檜皮葺師や原皮師(もとかわし)たちが活躍し、農業を本業としなが

ら檜皮葺に従事する「助職人」も多くいました。地元上久下小学校では、檜皮職人による授業が行われ、子どもたちは檜皮の採取・整形・葺きの体験などを通じて、伝統技術のすばらしさや守り伝えることの大切さを学んでいます。

檜皮葺は、約40年ごとに葺き替えが必要で、樹齢80年以上の檜から「原皮師(もとかわし)」が木べらで樹皮をはぎ、「成型職人」が材料を整え、「葺師(ふきし)」たちが口に含んだ竹釘を1本ずつ取り出しながら檜皮に打ち込み、美しいカーブを描いていきます。その技術は親方から弟子へと受け継がれ、職人たちは互いの技術を高め合いながら次代へと継承してきました。

世界に誇る伝統の技

こうして大切に受け継がれてきた匠の技は、令和2(2020)年12月にユネスコ無形文化遺産に登録されました。また、丹波の檜皮職人たちを記録したドキュメンタリー映画が海外の国際映画祭で受賞するなど、長年にわたり日本の文化財を守ってきた伝統技術は海外でも高い評価を得ています。



竹釘製造

日本でただ一人の竹釘師・石塚直幸さんが製造する竹釘。檜皮葺には1坪あたり約3,500本の竹釘が必要で、最後に焙煎することで強い竹釘が生まれます。

檜皮葺の工程

1 材を採る

もとかわし
原皮師



木べらでめくり上げながら檜皮をはぎ取ります。「振り縄」を木にかけ、時には20m以上も登って檜皮を採取します。

2 部品を作る

成型職人



熟練の技で檜皮を整形。複数の檜皮を重ね、檜皮包丁の先でコツコツとたたいて、一定の厚み・長さを整えます。

3 屋根を葺く

ふきし
葺師



整形された檜皮を屋根の枠組に沿って丁寧に並べ、口に含んだ竹釘を1本ずつ取り出して打ち込みます。

丹波市が誇る、未来へ伝えるべき歴史遺産

柏原藩陣屋跡



柏原藩の政治の舞台「柏原藩陣屋」

江戸時代に創建され、柏原藩の政治の舞台として栄えた「柏原藩陣屋」。ここを中心に柏原地域は城下町として栄え、今も当時の面影がまちのあちこちに残っています。

柏原藩の歴史は、慶長3(1598)年に織田信長の弟・信包(のぶかね)が藩主として統治に就いたことではじまります。その後一度は途絶えたものの、元禄8(1695)年に信長の次男・信雄(のぶかつ)の子孫である信休(のぶやす)によって再興され、廃藩置県までの約200年間、織田家が10

代にわたってこの地を治めました。

石高が少ない小さな藩は城を持たず、藩庁(藩の役所)と居宅を兼ねた陣屋を築きますが、財政事情の困窮により正徳4(1714)年によく陣屋が完成しました。文政元(1818)年の火災で多くが焼失しましたが、翌々年に再建されました。現存している表御殿は、藩士や来客との対面の際など、公的な儀礼の場として使用されました。

陣屋の正門にあたる長屋門は創建当時のもので、昭和37(1962)年に解体修理が行われ、「柏原藩主織田家旧邸長屋門」

として県の有形文化財(建造物)に指定されました。

明治維新により学校として再出発

柏原藩陣屋跡は、廃藩置県により陣屋としての役目を終え、明治6(1873)年に「崇広小学校」として再出発しました。そして、幕末から近代に至る学制の変遷を考えるうえでも貴重であるとして、昭和46(1971)年に国の記念物(史跡)に指定されました。表御殿(一部)と長屋門がどちらも現存する全国でも貴重な歴史遺産です。



創建当時は、東西130m、南北158mという広大な敷地に御殿や庭園が設けられていました。



新時代への夜明けを告げる、明治の近代学校建築

たんば黎明館



近代洋風学校建築の魅力が随所に

「教育は国家の根底なり、学校は教育の土壌なり」。たんば黎明(れいめい)館は、子どもたちの教育に情熱を注いだ先人たちの志により、明治18(1885)年、水上郡各町村組合立高等小学校として建築され、明治42(1909)年、水上郡立柏原高等女学校(県立柏原高等女学校/県立柏原高等学校の前身の1校)の校舎となり、以来、農学博士の安藤広太郎や教育者の芦田恵之助、俳人の細見綾

子らを輩出してきました。その後、柏陵同窓会館、水上郡教育委員会事務所を経て、昭和56(1981)年に「大手会館」に名称変更し、地域の人に活用されました。その建築様式には、玄関上部のバルコニーとそれを支える円柱、ステンドグラスを配した半円形の飾り窓など、近代洋風学校建築の魅力が随所に見られます。また、廊下や階段、窓枠などもノスタルジックな雰囲気醸し出しています。外観はほぼ建築当時の姿を残しており、県内に現存する最古の近代初等教育施設として、平成21

(2009)年に県の有形文化財(建造物)に指定されました。

新しい時代を創造する施設「たんば黎明館」へ

新時代への夜明け「黎明」を告げる学校として活躍したこの建物は、平成27(2015)年、床や柱など老朽化した部分の修復や塗装が施されるとともに、通称「たんば黎明館」と名付けられ、観光名所として親しまれています。

風が出会い、生命が行き交う道

氷上回廊



本州一低い中央分水界「水分け」

日本列島に降った雨は、中央を走る高い山々の頂上付近を境に、北は日本海へ、南は太平洋へと流れていきます。「水に分ける境界」という意味から「中央分水界」と呼ばれ、1,000m～3,000m級の高い山々が、約5,000kmにわたって続いています。

しかし、兵庫県から京都府の内陸部にかけては、南北に伸びる低地帯「氷上回廊」によって山々が寸断され、わずかに標高95mで中央分水界をまたぐことができます。中でも



「水分け(みわかれ)」は、本州で最も低い中央分水界とされ、ここに降った雨は田んぼやまちのまん中で分かれ、一方は由良川(日本海)へ、もう一方は加古川(瀬戸内海・太平洋)へと流れていきます。

風が出会い、生命が行き交う「氷上回廊」

二つの川に沿って田園風景が広がるこの細長い低地帯は、まるで日本海と太平洋を結ぶ1本の道のようにも見えます。瀬戸内海からの暖かい風と日本海からの湿った風は、この低地帯をたどって氷上回廊で出会い、双方の風が運んできた雨や雪が大地を潤し、美しい霧の風景を生み出しました。こうして「氷上回廊」は、南北を行き交う「抜け道」として古くから交通の要衝であると同時に、植物や水辺の生きものなどの通り道として、自然や人々の暮らしにさまざまな影響を与え、生物多様性のもとで私たちの豊かな暮らしを育んできました。

氷上回廊

水分けフィールドミュージアム

地形や生態系、人やモノの交流の歴史など、氷上回廊のすべてを学べる施設として、令和3年にリニューアルオープンしました。地形のしくみをシミュレーションできる体験模型やプロジェクトマップなど、五感を使って体験できる「小さいけれども学びがたっぷりの博物館」です。



【ロゴマーク】山々に囲まれた盆地や水の流れ、中心の点で「水分け」を表現しています。



美しい霧の風景を描き出す、丹波の里山

豊穡の地 丹波

霧の中で育まれる丹波の食材

兵庫県最大の農地面積を誇る丹波市。秋から冬にかけて発生する丹波霧は、広大な農地をしっかりと包み込み、農作物の成熟に欠かせない潤いをもたらしてくれます。風が出会い、生命が行き交う「豊穡の地 丹波」は、この地特有の気候風土が生み出した豊かな食文化が息づき、古来、お

いしい農作物がとれる地域として栄えてきました。

太陽の光を浴びた作物は、夜になり気温が下がると実にでんぷんをしっかりと蓄え、それを繰り返すことで甘みを増し、成熟していきます。昼夜の寒暖差、栄養分を豊富に含む粘土質の土壌、きれいな水や丹波霧。おいしい作物が育つための重要な要素がこの地域にはそろっています。

こうして栽培された丹波大納言小豆や丹波栗など、丹波市を代表する特産物は、古くから京の都に献上され、現在では「丹波市ブランド」として全国に知られています。また、米や野菜、果樹など、この地でとれる作物はどれも味わい深く、市内外の消費者や素材にこだわる全国の飲食店などでも高く評価されています。





まごころが通じ合う 豊かなおいしさ

まごころ

丹のやさい

生産者の活力と誇りにつながる
丹波市の農業

令和6(2024)年8月、丹波市産農産物の統合ブランドとして、「丹(まごころ)のやさい」が誕生しました。農産物等直売所での販売をはじめ、一般流通や消費者と直接取引している農業者が、消費者の顔を浮かべながら「まごころ」を込めて栽培・収穫した農産物の総称で、市内直売所をはじめ阪神間のスーパーなどでも販売されています。

連日、市内の直売所にはたくさんの新鮮野菜などが並び、安全・安心でおいしい農産物を求め、遠方からも多くの買い物客が訪れています。

また、大阪・神戸などでのイベント出店やSNSなどを通じて、「丹(まごころ)のやさい」のおいしさと魅力を世界に発信しています。



兵庫県丹波市
ブランドロゴ



「有機の里いちじま」の想いを継承し
環境にやさしい農業を推進

市島地域は「有機の里」として知られ、1970年代から有機農業の取り組みがはじまりました。以来、約50年にわたって、農薬や化学肥料に頼らない野菜づくりが行われてきました。平成20(2008)年には、市島有機農業研究会の呼びかけで丹波市有機農業研究会が発足し、消費者や生産者に広く浸透。令和5(2023)年3月には、生産者だけでなく市民や企業がそれぞれの立場で大切な地域資源を未来の子もたちにつないでいくため、「オーガニックビレッジ」を宣言しました。

丹波市では、生産技術の定着と向上をめざした栽培講習会や販路開拓に向けた出展、たんばオーガニックフェアなど、各種取組を通じて、有機農業を含めた環境にやさしい農業を推進しています。

より実践的に、より深く
「農の学校」で生きた農業を学ぶ

丹波市立「農(みのり)の学校」は、新規就農者の育成を目的とした全日制(1年間)の農業学校で、平成31(2019)年4月、市島地域に開校しました。年齢や経験の有無にかかわらず、農業を志す人たちが、市内の農家をはじめ有機農業界トップクラスの講師陣から有機栽培技術や農業経営など生きた農業を学び、収穫した作物は受講生が自ら出荷販売しています。

令和6年度(第6期)までに、修了生91名のうち約6割が市内で就農するなど、「農」への一歩を丹波市で踏み出す若者も増え、地域農業の担い手確保にもつながっています。

